# 文字処理・数学関数・オブジェクト

## 文字列の処理

　Excel VBAには文字列を処理する関数があります。下のプログラムを実行してみて下さい。

moji = "abcあいうえおxyz"

Range("a1") = Len(moji) ' 文字列の長さ

Range("a2") = Left(moji, 4) ' 左端から4文字取り出す

Range("a3") = Right(moji, 5) ' 右端から5文字取り出す

Range("a4") = Mid(moji, 3, 2) ' 3文字目から2文字取り出す

Range("a5") = InStr(moji, "c") ' 文字列 "c"は何文字目か？

Range("a6") = InStr(moji, "p") ' 文字列 "p"（含まない）は

' 何文字目か？

Range("a7") = InStr(moji, "cあ") ' 文字列 "cあ" は何文字目か？

　文字列を扱う関数の働きは以下の通りです。全角文字と半角文字はどちらも1文字とカウントされます。

* Len(s)：文字列sの長さを返す
* Left(s, n)：文字列sの左端からn文字取り出す
* Right(s, n)：文字列sの右端からn文字取り出す
* Mid(s, n, m)：文字列sのn文字目からm文字取り出す
* Instr(s, c)：文字列sの中に文字列 c が含まれる場合は、何文字目かを返す。含まれない場合は0を返す。複数回含まれる場合は最初に見つかった位置を返す。検索する文字列は "cあ" のように2文字以上でも構わない。

　文字列を扱う場合、文字列の右端や左端に空白が含まれる場合、それをあらかじめ除去しておきたい場合があります。Trimを使います

moji2 = " abc de fgh ijk " ' Trimの違いを調べる

Range("b1") = moji2

Range("b2") = Trim(moji2)

Range("b3") = WorksheetFunction.Trim(moji2)

　Trimは文字列の左右に空白が含まれている場合に、それを切り落とします。ただし、注意事項があります。Excel VBAに備わっているTrim関数とワークシート関数Trim（セルの中に =Trim(A2) のように書く関数）は動作が異なります。違いは以下の通りです。

* Excel VBAのTrim関数………文字列の左右の空白だけを切り落とし、文字列の中間に含まれている空白はそのままです。
* WorksheetFunctionのTrim関数………左右の空白を切り落とす処理に加えて、文字列の中間に2個以上の空白が連続している場合、1個の空白に置換します。Split関数を使うときなどにこの処理が必要です。

【例題】

　シート「文字列操作」のA列に名字と名前が入っています。全角空白で区切られています。名字の部分と名前の部分に分解しなさい。

For i = 2 To 10

moji = Range("A" & i)

a = InStr(moji, "　") ' ダブルクオーテーションの中は全角空白

Debug.Print "i = " & i & " a = " & a

If a <> 0 Then

l = Len(moji)

myouji = Left(moji, a - 1)

namae = Right(moji, l - a)

Range("B" & i) = myouji

Range("C" & i) = namae

End If

Next i

　空セル、あるいは空白を含まない文字列が来た場合はa = 0となります。その場合は、何も処理をしないようにIf文を使っています。

　文字処理としてはLen(), Left(), Right(), Mid(), InStr()の他にSplit()を知っておくと便利です。シート「文字列操作2」を見て下さい。A1に入っている文字列を "," を区切り文字として分解して、B列に並べます。

moji = Range("A1")

moji\_list = Split(moji, ",")

a = LBound(moji\_list)

b = UBound(moji\_list)

Debug.Print a & " " & b

j = 1

For i = a To b

Range("B" & j) = moji\_list(i)

j = j + 1

Next i

　Split(moji, ",") と書くと、文字列を格納した変数を、区切り文字 "," で分解して配列moji\_listに格納します。この場合は、Dim moji\_list(100) のように配列の宣言は不要です。LBound(moji\_list)は配列moji\_list() の添字の下限を取得し、UBoundは上限を取得します。Splitで得た配列の添字の下限は0なので、上記のプログラムは冗長かもしれません。配列の下限を0と決め打ちしても構いません。

【課題1】

　シート「文字列操作2」のA10に英語の文章が入っています。これを単語ごとに分解してB10, B11, B12, .... に並べるプログラムを作りなさい。

## テキストファイルの読み書き

　Excel VBAでテキストファイルを読み込み、書き出しすることができます。まずは、ファイルを書き出してみましょう。セルA1の内容をファイルに書き出してみます。

filename = ThisWorkbook.Path & "\out.txt"

Open filename For Output As #1 ' ファイルを作成し装置番号1を

' 割り当てる

Debug.Print "A1 : " & Range("A1")

Print #1, "A1 : " & Range("A1")

Close #1 ' ファイルを閉じる

　まず作成するファイルの名前をfilenameという変数に入れます。

　ThisWorkbook.Pathはxlsmファイルが存在するフォルダ名（例えば"C:\Users\ユーザー名\Documents\フォルダ名"）に置換されます[[1]](#footnote-1)。その文字列に "\out.txt" という文字列を連結します。"\" はフォルダとフォルダを区切る文字です[[2]](#footnote-2)。filenameの内容は"C:\Users\ユーザー名\Documents\フォルダ名\out.txt" のようになります。

Open filename For Output As #1

と書くと、filenameという名前のファイルを作成し、装置番号1番に割り当てます。

　ファイルに書き出すPrint文とイミディエイトウィンドウに書き出すDebug.Printの使い方は同じです。対比させるため、Debug.Printを併記しています。

Print #1, ○〇〇

と書くと、○○○の内容をファイルに書き出します。書き出す文字列や変数名は & で接続します。セルA1の内容が「数値」「文字列」のどちらでも接続できます（数値の場合は文字列に変換してから接続します）。

　ファイルに書き出し終わったら、最後に装置番号1番を閉じます。

Close #1

　これを怠ると、ファイルは作成されますが、内容は空という状態になります。Excelを終了すると、Close #1が自動的に実行され、ファイルの内容が確定します。

　複数のファイルを同時にオープンするときは、#2, #3のように別の装置番号を使います。

　A1～A10のセルの内容を行番号付きで書き出してみましょう。

filename = ThisWorkbook.Path & "\out.txt"

Open filename For Output As #1

For i = 1 To 10

line = i & ":" & Range("A" & i)

Print #1, line

Next

Close #1

　1行分の内容を変数lineに入れ、Print #1, lineでファイルに書き出しています。

　こんなこともできます。A列に入っている名前のファイルを作成し、内容としてB列の文字列を入れます。各個人用にファイルを作成するときなどに使えます。

For i = 1 To 4

filename = ThisWorkbook.Path & "\" & Range("A" & i)

Open filename For Output As #1

Print #1, Range("B" & i)

Close #1

Next i

　次は、ファイルの内容を読み取るプログラムの書き方を示します。以下のような内容がテキストファイルin.txtに入っていることを仮定します。名前の手前や数値の後ろには半角空白が入っています。

yabu 10 20

aoki 30 40

sinjyou 50 60

suzuki 70 80

　ファイルから1行読み取って、セルA1に入れるプログラムは以下のように書きます。

filename = ThisWorkbook.Path & "\in.txt"

Open filename For Input As #1

Line Input #1, line ' 1行読み取って変数lineに入れる

Range("A1") = line

Close #1

　行数が分からないファイルを、ファイルの末尾まで読み取って、A1, A2, A3....の列に入れるプログラムは以下のように書きます。Do Until EOF(1) は定番表現であり、装置番号1をファイルの終わりまで読むことを表します。

i = 1

Do Until EOF(1)

Line Input #1, line ' line に1行分入る

Range("A" & i) = line

line = line + 1

Loop

　上記の処理に加えて、空白で区切られた文字列を分解して、A, B, C列に入れるには、以下のように書きます。主要部分を記します。

i = 1

Do Until EOF(1) ' ファイルの最後を見つけるまで繰り返す

Line Input #1, line ' 1行読み取って変数lineに入れる

line = WorksheetFunction.Trim(line) ' 左右の空白を削除し

' 途中の複数の空白を1個にする

buf = Split(line, " ") ' 空白で区切られている文字列を分解して

' buf(0),buf(1).... に格納する

For j = 0 To UBound(buf) ' UBound(buf) は配列の添え字の上限

Cells(i, 1 + j) = buf(j)

Next j

i = i + 1

Loop

　スペースで区切られた文字列を分けるため、WorksheetFunctionのTrim関数を使っています。

line = WorksheetFunction.Trim(" abc 10 20 ")

を実行すると、lineは

"abc 10 20"

となります。左右の空白が切り取られ、文字列と文字列を区切っていた空白は1個だけになります。Excel VBAのTrim関数は左右の空白は切り落としますが、abc と 10 の間のスペースは（3個）はそのままになるので、この場合には使えません。

　Split関数は文字列を分解します。Split関数の第1引数は入力する文字列、第2引数は区切り文字です。分解した結果は配列変数となって返ってきます。buf = Split(line, " ") と書くと、buf(0), buf(1), buf(2),..... に分解された文字列が入ります。この場合のみ宣言せずに配列変数が使えます。配列変数buf( ) の添字の上限を調べるのがUBound(buf)です。buf(0), buf(1), ..... buf(4)まで文字列が入っている場合、UBound(buf) は4になります。

　j のForループを用いて、分解した結果をセルに入れます。

　ここでは、空白で区切られた例を扱いましたが、CSVファイルの場合、コンマで区切られています。CSVファイルを読み取る場合、WorksheetFunction.Trimの処理は不要で、以下のように書きます。

buf = Split(line, ",") ' buf(0),buf(1).... に格納される

　本節では、VBAを使ってファイルの書き出しと読み込みを行いました。ほぼ同等のことを手動で行うこともできます。

　読み込みはOffice 2016などの場合、「データ」→「外部データの取り込み」→「テキスト」です。Office 365の場合、「ファイル」→「オプション」→「データ」で「レガシデータインポートウィザードの表示」の「テキストから（レガシ）」にチェックを入れてから、「データ」→「データの取得と変換：データの取得V」→「従来のウィザード」→「テキストから」です。

　書き出しは、「ファイル」→「名前を付けて保存」です。ファイル形式として以下の4つの形式があります。CSV形式がポピュラーです。

* テキスト（タブ区切り）(\*.txt)………半角文字は1字1byte, 全角文字は1字2byteで漢字コードはSJISです。改行は0d 0aの2byteです。
* Unicodeテキスト(\*.txt)………タブ区切りで漢字コードはUTF16-Little Endianです。全角文字も半角文字も1字2byteです。改行は0d 00 0a 00の4byteです。
* CSV（カンマ区切り）(\*.csv)………漢字コードはSJISです。
* テキスト（スペース区切り）(\*.prn)………漢字コードはSJISです。1セル8 byte固定で、それを超えた文字数は切り捨てられます。あまり使い道はなさそうです。

## 数学関数

　基本的な数学関数には以下のような関数があります。

Int(x) 整数化 Int(2.5) --> 2 Int(-2.5) ---> -3

Sqr(x) 平方根

Abs(x) 絶対値

Log(x) 底をeとする自然対数

　Excelのワークシート関数にも同等の機能を持ったものが揃っていますので、そちらを使っても構いません。Logはワークシート関数とVBA関数とで底が異なっていますので、使用時は注意して下さい。ワークシート関数は以下のように使います。

WorksheetFunction.Round(x, 0) ' 小数点以下1桁目を四捨五入して整数にする

WorksheetFunction.Ln(x) ' 底はe

WorksheetFunction.Log(x) ' 底は10

## オブジェクト変数の使用

　本節の内容は高度なので、必要なときに読み返して下さい。

　Range("A2") などをオブジェクトと呼びます。これを変数のように扱うことができます。まずは、下の例を見て下さい。

Dim a As Object ' As Range でもよい

Set a = Range("A1")

a.Interior.Color = RGB(255, 200, 200)

　aはオブジェクト変数です。オブジェクト変数は必ず宣言する必要があります。

　2行目でオブジェクト変数にRange("A1") を代入しています。普通の変数とは異なり、オブジェクト変数への代入はSetが必要です。

　Rangeオブジェクトが含むセルの個数は1個とは限りません。Range("A1") なら一つですが、Range("A1:B3") ならA1, A2, A3, B1, B2, B3の6個です。Range("A1:B2,D4") ならA1, A2, B2, B3, D4の5個です。

　複数のセルを含むRangeオブジェクトを1個1個のセルに分解するには以下のようにします。次のプログラムを実行してみて下さい。

Dim a As Object, c As Object

Set a = Range("A1:C2")

i = 1 ' オブジェクトの順番を調べるために

For Each c In a ' 1, 2, 3, 4, .... と書き込む

c.Value = i ' .Value は省略可能

i = i + 1

Next c

　For Eachという新しいループが登場しました。

For Each c In a

においてcはObject型かVariant型であることが必要です。aはObjectか配列であることが必要です。上のように書くと、aの要素から1つずつ取り出してcに入れます。

　Range("A1:C2") は6個のセルを含みます。この場合、For Each のループは2行×3列=6回実行されます。cはRange("A1") → Range("B1") → Range("C1") → Range("A2") → Range("B2") → Range("C2") の順番になります。上記のプログラムを実行することでその順番が分かります。

　Selectionは現在選択されているRangeオブジェクトを表します。次のように使います。

Dim a As Object

Set a = Selection

Debug.Print a.Address

Debug.print a.Count

　a.Addressで "A1:B3" のような「範囲を表す文字列」を取り出すことができます。

　a.Count でセルの個数を取得できます。

　a(1), a(2),... a(n) で個々のセルにアクセスできます（注：a(0) にアクセスするとエラーが発生します）。ただし、この方法は領域が長方形のときしか使えません。「Ctrl + 左クリック」で飛び飛びの場所を指定した場合には使うことができません。

　「ctrl + 左クリック」を2回行って2つのセルを選択した状態で、その2つのセルの内容を入れ替えるには以下のように書きます。

Dim a As Object, c As Object

Dim address(2)

Set a = Selection

i = 1

For Each c In a

address(i) = c.address

i = i + 1

Next c

tmp = Range(address(1)).Value

Range(address(1)).Value = Range(address(2)).Value

Range(address(2)).Value = tmp

　上記のプログラムで、末尾3行の .Value は省略可能です。

　Excelでオブジェクト変数を使うのは、筆者の経験では以下のような場合です。

* 選択した複数のセルを扱うとき
* テキストボックス、図形要素を扱うとき

1. 「Office 365のExcel」「OneDriveを使用している」の2つの条件が満たされたとき、ThisWorkbook.Pathの値はhttps://xxxxx.jp-mysharepoint.com/personal/xxxxx\_cc\_nara/Documents/....という値になり、プログラムを実行すると「ファイルが見つかりません」というエラーが出ます。そのときは、OneDriveの設定のOfficeタブにおいて「Office アプリケーションを使用して、開いているOfficeファイルを同期する」のチェックを外して下さい。 [↑](#footnote-ref-1)
2. ThisWorkbook.Pathを省略して、

   filename = "out.txt"

   と書くと、現在のフォルダの直下にout.txtを作成します。現在のフォルダはイミディエイトウィンドウでPrint CurDirと打ってEnterを押すと得られます。Excelの場合、ドキュメントフォルダの直下です。

   filename = "\out.txt"

   と書くと、ドキュメントフォルダがあるドライブのルートにout.txtを作成します。 [↑](#footnote-ref-2)